

論 説

人口減少対策に向けた若者の結婚観に関する分析
－ いよぎん地域経済研究センターとの共同研究の経過報告－

岡 村 伊 織* (産業マネジメント学科)

* 責任著者

Attitudes toward marriage among young people in relation to population decline:
A report on the collaborative study
with the Iyogin Regional Economy Research Center

Iori Okamura * (Industrial Management)

* Corresponding author

キーワード：人口減少、結婚観、地域連携

Keywords: Population decline, Marriage attitudes, Regional collaboration

【原稿受付：2026年1月19日 受理・採録決定：2026年1月30日】

要旨

本研究は、愛媛大学といよぎん地域経済研究センターの共同研究の一環として、大学生の結婚観に関するアンケート調査を実施し、若者の結婚意向に関連する要因を明らかにすることを目的とした。対象は愛媛大学社会共創学部の学生169名であり、結婚意向の強さを順序ロジットモデルによって分析した。その結果、多くの学生が結婚意向を有することが確認された。また、「恋愛・結婚に対する充実感」が結婚意向を高める傾向を示したのに対し、「現状への満足」「結婚・子どもによるコスト認知」「夫婦間の平等志向」は結婚意向を抑制する傾向がみられた。これらは、近年の若者に特徴的な一人での生活への満足や夫婦間の平等志向といった価値観が結婚意向に影響を及ぼしている可能性を示唆している。以上の知見は、少子化・人口減少対策を検討する上で基礎的資料となり、今後の結婚支援や地域施策のあり方を考えるうえで有益であると考えられる。

Abstract

This study, conducted as part of a collaborative research project between Ehime University and the Iyogin Regional Economy Research Center, aimed to identify the factors associated with young people's intentions to marry through a survey on university students' views on marriage. The survey targeted 169 students from the Faculty of Collaborative Regional Innovation at Ehime University, and the strength of marriage intention was analyzed using an ordered logit model. The results showed that most students expressed a positive intention to marry. While a strong sense of fulfillment in romantic relationships was associated with a higher intention to marry, factors such as satisfaction with one's current life, perceived costs of marriage and childbearing, and egalitarian attitudes toward marital roles tended to reduce marriage intention. These findings suggest that contemporary values among young people—such as contentment with living alone and the pursuit of equality within marriage—may affect their marriage intentions. Overall, the study provides useful insights for policies and community initiatives aimed at addressing population decline.

1. はじめに

地方における人口減少は、地域社会の存続を左右する重要な課題であり、愛媛県をはじめ、多くの地域で労働力確保、地域経済や公共サービスの維持が課題となっている。人口減少の要因としては出生数・合計特殊出生率の低下による自然減による人口減と、人口の県外流出による社会減による人口減があげられる。このうち、自然減による人口減少への対応として、人口減少が進行し続けることを前提として社会の在り方を設計するという「適応的対策」と、人口減少の進行速度を少しでも和らげるための「緩和的対策」の両方が求められる。

若年人口の減少が続き、少子化のトレンドを完全に反転させることは困難になっている今日では、労働節約的な技術の採用や、公共サービスの効率化などの適応的対策の実施が不可欠である。他方で、人口減少の進行そのものを少しでも抑えるための緩和的対策も同様に重要である。具体的には、結婚や出会いの支援、妊娠・出産に対する経済的支援、子育て環境の整備、若者の就業安定化などが挙げられる。こうした取り組みは、短期的にはコストを伴うが、長期的には人口減少による社会的コストを軽減する効果が期待される。

地域の人口減少に関する様々な課題に対して、愛媛大学といよぎん地域経済研究センター（以下、IRC）は共同で包括的な研究プロジェクトを展開している。IRCは自治体や地域企業との連携事業を数多く実施しており、大学との協働によって、単なる学術研究にとどまらず政策や施策の「地域実装」に直結することが期待される。また、同プロジェクトは単年限りの取り組みではなく、複数年にわたり継続的に進められる予定であり、地域の人口問題に長期的な視点から取り組む枠組みとなっている。

その最初のステップとして位置づけられたのが、人口減少に対する「緩和的対策」に関連する調査であり、愛媛県に暮らす若年層の「結婚観」を明らかにする研究である。日本では出生の大半が婚姻内で生じているため、婚姻率の低下は出生数の減少に直結する。したがって、若者が結婚にどのような意識や価値観を抱いているのかを把握し、その変化や関連要因を明らかにすることは、人口減少の緩和策を検討する上で不可欠である。本研究は、愛媛大学とIRCの連携による地域密着型の調査として、その基礎的な知見を提供することを目的としている。

本研究の主たる目的は、大学生を対象としたアンケート調査を通じて、若者の結婚観に影響を与える要因を明らかにすることである。さらに、それに次ぐ目的として、愛媛大学といよぎん地域経済研究センター（IRC）が進めてきた共同活動の成果を整理し、今後

の大学と地域の連携に資する基礎的資料を提供することが挙げられる。

本稿の構成は以下の通りである。まず、次節では、研究の背景として、愛媛大学とIRCとの共同プロジェクトの概要や、関連する先行研究について述べる。第3節では、用いるデータと分析の方法について述べる。第4節では、得られたデータを基にした計量分析の結果について述べる。最後に、第5節で結論を述べる。

2. 研究背景

2.1. 愛媛大学とIRCとの共同プロジェクトについて

本プロジェクトは、地域にとって最重要課題の一つである人口減少に関する問題を幅広く分析し、得られたデータに基づいて社会に貢献することを目的としている。あわせて、学生に調査設計やデータ分析に参加する機会を提供することで、教育的効果をもたらすことも重視している。さらに、プロジェクトで得られたデータや成果を活用することで、大学教員の教育・研究を推進し、学術的蓄積にも資することを目指している。

プロジェクトの過程では、学生も積極的にディスカッションに参加し、若者自身の視点から結婚観に関する意見を収集するとともに、教育的な学習機会を提供した。調査票の作成はIRCと愛媛大学教員が共同で進めつつ、愛媛大学の学生も加わり、質問項目を検討・修正しながらブラッシュアップを行った。また、得られたデータの分析に際しては、IRCと大学教員が共同で統計的手法についての検討をおこなった。なお、本研究で用いたデータ以外にも追加的なデータ収集を行い、分析を実施する予定である。

今回の研究は、人口減少に関する課題のうち「結婚観」に焦点を当てたものであり、プロジェクトの第一歩として位置づけられる。今後は、より少子化に直接関わる出生選択に関する研究や、人口流出といった社会減に関する研究にも対象を広げ、愛媛県における人口問題の解決に資する成果の提供を目指していく予定である。

2.2. 先行研究

未婚者の結婚・出産についての考え方に関する代表的な全国調査として、国立社会保障・人口問題研究所が実施する「出生動向基本調査・独身者調査」（以下、基本調査）がある（国立社会保障・人口問題研究所、2023）。基本調査によれば、未婚者の多くはいずれ結婚する意向を持っており、特に20代前半ではその割合がきわめて高い（男性で約87%、女性で約89%が「いずれ結婚するつもり」と回答）。この結果は、若年

層において結婚が依然として標準的なライフコースとして強く意識されていることを示している。また、結婚意向の男女差に着目すると、女性の方がやや高い割合で「いずれ結婚する」と回答する傾向があることも示されている。さらに、就業状態や学歴といった社会経済的要因によっても違いがみられ、安定した雇用や収入を持つ層で結婚意向が高いことが指摘されている。

なお、基本調査の「結婚意向を有する未婚者」を対象とした結果によると、「一年以内に結婚する際の障害」として最も多く挙げられるのは結婚資金・住居・仕事などであり、特に経済的要因が大きいことが明らかになっている。こうした結果は、結婚意向そのものは依然として高いものの、実際の結婚という行動を起こすには、経済的制約が大きな障壁となりうることを示唆している。

基本調査に加えて、先行研究では独自のアンケート調査に基づき、結婚意向に影響を与える多様な要因を明らかにしている。たとえば、愛媛県・一般財団法人地方自治研究機構（2023）においては、結婚相手に求める条件としては、「価値観が近いこと」（76.7%）や「一緒にいて心地よいこと」（65.1%）が特に重視されていること、特に女性においては「家事を分担してくれること」や「経済力があること」を重視する割合が高いことが指摘されている。また、鈴木（2024）では、相手の条件に加えて、自身の外見や性格が結婚意向に影響することを指摘しており、女性の場合は肥満傾向であると結婚意向が低くなり、男女ともに浪費癖がある場合に結婚意向が高まるなど、興味深い結果が得られている。

結婚希望に影響する要因としては、家族関係に関する研究も蓄積されている。山内・伊藤（2008）や森・桂田（2017）は、親の夫婦関係を肯定的に捉える若者ほど結婚を前向きに評価しやすいことを示している。一方で、斎藤（2012）は、親の夫婦関係の良好さを目にしてきた若者は結婚意向が強まるが、不仲を経験した場合には希望が弱まる傾向があると述べている。このように、今日に至るまでに多くの研究で、親の夫婦関係は、結婚意向に影響を及ぼすことが指摘されている。さらに、今川（2017）は、大学生において親とのコミュニケーションが結婚観に影響することを明らかにし、男子では父母との会話、女子では両親の夫婦関係そのものが影響することを指摘している。

このように、結婚観に関しては多様な要因が指摘されてきたが、その背景にある価値観は時代や社会状況によって変化しうる。本研究では、こうした点を踏まえ、今日の若者の意識のヒアリングを通して、分析に反映させることを重視した。具体的には、2.1で述べたような、学生とのディスカッションを通じて、従来

から結婚観との関連が指摘されてきた「結婚や家族による充実感」に加え、「将来への不安」や「結婚・育児に伴うコスト認知」といった要因も指摘された。これらの要因を総合的に考慮して結婚観との関連を探る点に、本研究の特色がある。

3. データと方法

本研究では、愛媛大学社会共創学部の学部生を対象としたアンケート調査を用いた。調査は2025年7月から8月にかけて実施し、Google Formsを利用して作成した質問票をQRコード経由で配布し、任意・匿名で回答を依頼した。有効回答数は169件であり、男性81名、女性88名と性別の偏りは小さい。一方で、学年別では1年生75名、2年生58名、3年生23名、4年生13名となり、比較的若い大学生を対象とした調査であることに留意する必要がある。質問項目は、性別や学年などの基本属性に加え、結婚に対する意向（「あなたの結婚に対する意向を教えてください」：4段階リッカート尺度）を中心に、恋愛や結婚に関する価値観、現在の生活満足度、子どもを持つことへの意識など幅広い内容を含んでいる。

本研究の分析は、次の二段階で構成される。まず、結婚観に関連しうる要因を抽出するために因子分析を行い、複数の質問項目の背後にある潜在的な構造を明らかにするとともに、多くの変数を縮約して解釈を容易にした。次に、これらの変数を用いて順序ロジットモデルの推定を行い、他の要因をコントロールしたうえで、結婚観に関連する要因を統計的に分析した。

4. 結果

4.1. 因子分析：結婚観の構成要素

因子分析の対象としたのは、「結婚相手を決める際の重視事項」「日常生活の満足度」「恋愛・結婚・子どもに関する価値観」に関する一連の質問項目である。因子数の決定にあたっては、平行分析（parallel analysis）に加え、MAPやBICといった基準を用いて総合的に判断した。因子の推定には最小残差法を用い、因子軸の回転は斜交回転の一手法であるオブリミン回転を採用した。これら複数の指標を基に検討した結果、「結婚相手を決める際の重視事項」と「日常生活の満足度」については2因子構造が、「恋愛・結婚・子どもに関する価値観」については5因子構造がそれぞれ妥当と判断された。

まず、表1に示した「結婚相手を決める際の重視事項」に関する変数についての因子分析の結果を述べる。なお、これらの質問項目については、結婚意向を持つ学生（「結婚したい」「どちらかといえば結婚したい」と回答した者）のみを対象に実施した。第1因子

表1 「結婚相手を決める際の重視事項」の変数についての因子負荷量

| 質問項目 | 因子負荷量 | | 共通性 |
|-----------------|--------------|--------------|-------|
| | 第1因子 | 第2因子 | |
| 学歴 | 0.724 | -0.121 | 0.484 |
| 職業 | 0.868 | 0.074 | 0.799 |
| 経済力 | 0.733 | 0.002 | 0.539 |
| 人柄 | 0.086 | 0.373 | 0.167 |
| 容姿 | 0.140 | 0.015 | 0.021 |
| 共通の人生観・価値観 | -0.029 | 0.663 | 0.428 |
| 仕事への理解と協力 | -0.081 | 0.509 | 0.240 |
| 家事・育児への取り組みや考え方 | 0.210 | 0.483 | 0.341 |
| 累積寄与率 | 0.239 | 0.377 | |

注：因子負荷量が0.3を超える値については太字に変換し、網掛けを施している。質問の際は「あなたが結婚相手を決めるとき、以上の項目についてどの程度重視しますか」という質問に対してどの程度そう思うかを4段階のリッカート法で尋ねた。

では、学歴・職業・経済力といった外的条件に高い負荷がみられた。このことから、第1因子は結婚相手の社会的地位や能力を重視する傾向を表しており、あえて口語的な表現をすれば、「スペック重視」と解釈できる。一方で第2因子では、人柄、価値観、仕事への理解、家事・育児への姿勢といった内面的・生活的側面に高い負荷がみられた。このため、第2因子は相手の人間性や価値観を重視する傾向を示すものと考えられ、「内面重視」と解釈した。なお、「容姿」については因子負荷量が第1因子、第2因子ともに少なかったため、解釈から除外した。

次に、表2に示した「日常生活の満足度」に関する

因子分析の結果を述べる。第1因子に着目すると、自分自身のおかれた環境に対する満足度や、新しいことへの挑戦意欲、心身の健全性に関する質問で高い負荷がみられる。このことから、第1因子は現在のおかれている状況に関しての総合的な満足度が高い傾向を示しており、「生活満足感」というように解釈した。一方で、第2因子については、将来に対する不安や自分自身に対する無力感が低い傾向を示していることから、この因子については「将来や自身への不安」というように解釈した。

最後に、「恋愛・結婚・子どもに関する価値観」についての因子分析の結果については、表3の通りであ

表2 「日常生活の満足度」の変数についての因子負荷量

| 質問項目 | 因子負荷量 | | 共通性 |
|--------------------------|--------------|--------------|-------|
| | 第1因子 | 第2因子 | |
| 自分自身に満足している | 0.567 | -0.174 | 0.439 |
| 自分はいまよくわからないことにも意欲的に取り組む | 0.475 | -0.011 | 0.231 |
| 自分はありのまま、素直に生きていると思う | 0.456 | 0.067 | 0.185 |
| 自分には「居場所」があると思う | 0.688 | -0.014 | 0.482 |
| 今の生活は心身ともに良好だと思う | 0.719 | 0.064 | 0.480 |
| 将来に漠然とした不安がある | 0.006 | 0.572 | 0.324 |
| 経済的に自立できる自信がない | 0.050 | 0.822 | 0.641 |
| 自分は役に立たないと感じる | -0.230 | 0.560 | 0.482 |
| 累積寄与率 | 0.232 | 0.408 | |

注：因子負荷量が0.3を超える値については太字に変換し、網掛けを施している。質問の際は、「あなたの普段の生活の満足感やご自身についてあてはまるものを答えてください」という質問に対してどの程度そう思うかを4段階のリッカート法で尋ねた。

人口減少対策に向けた若者の結婚観に関する分析

る。第1因子に着目すると、恋愛や結婚に対する積極的な姿勢や、恋愛・結婚によって得られる豊かさについての認識が高い傾向がみられた。このことから、第1因子は、恋愛や結婚によって得られるメリットへの認識や積極性を示す因子と解釈され、「恋愛・結婚に対する充実感」と名付けた。次に、第2因子と第3因子に着目すると、似たような傾向を示すものの、第2因子のほうが結婚や子どもを持つことによる制約に高い負荷が集中していた。したがって、第2因子は「結婚・子どもによるコスト」と解釈した。一方で、第3因子については、子どもを持つことによる因子負荷量

は相対的に小さく、恋愛や結婚による時間の制約や精神面での負担について項目に負荷が高いことが確認された。そのため、第3因子は、子どもよりもむしろ恋愛や結婚がもたらす時間的・心理的コストを反映する因子と捉え、「恋愛・結婚によるコスト」と解釈した。第4因子では、家事や育児、家計の分担について夫婦が平等であるべきとする項目に高い負荷がみられ、この因子は「夫婦間負担の平等志向」と解釈した。最後に第5因子については、恋愛の積極性に関連する一部の項目に加えて、配偶者の年収や経済的自立といった項目に特に高い負荷がみられたことから、「経済的自

表3 「恋愛・結婚・子どもに関する価値観」の変数についての因子負荷量

| 質問項目 | 因子負荷量 | | | | | 共通性 |
|---------------------------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|-------|
| | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 | 第4因子 | 第5因子 | |
| 恋愛・結婚についての意識 | | | | | | |
| 積極的に恋愛したい | 0.374 | -0.107 | -0.343 | -0.051 | 0.368 | 0.512 |
| 恋愛と結婚は別だ | 0.007 | 0.196 | 0.148 | 0.007 | 0.140 | 0.093 |
| 恋愛よりも趣味や勉強や仕事を優先したい | -0.134 | 0.025 | 0.545 | -0.009 | 0.028 | 0.364 |
| 恋愛や結婚は面倒だ | -0.252 | 0.112 | 0.470 | -0.010 | -0.003 | 0.387 |
| 結婚したら子どもが欲しい | 0.544 | -0.070 | -0.030 | -0.125 | -0.009 | 0.332 |
| 結婚という形をとらないことも選択肢の一つだ | -0.101 | 0.236 | 0.203 | 0.017 | 0.067 | 0.146 |
| 結婚は幸せになるためのステップだ | 0.502 | -0.205 | -0.181 | -0.024 | 0.103 | 0.436 |
| 結婚しても夫婦共働きが望ましい | 0.083 | 0.035 | 0.122 | 0.189 | 0.510 | 0.405 |
| 結婚することで精神的な安らぎを得ることができる | 0.605 | 0.091 | -0.296 | -0.136 | -0.052 | 0.555 |
| 寂しい老後を送りたくないために結婚を考える | 0.470 | 0.159 | -0.058 | 0.113 | 0.116 | 0.305 |
| 結婚のための出会いとして職場恋愛はありだ | 0.286 | 0.236 | -0.159 | 0.021 | -0.144 | 0.170 |
| 恋愛や結婚は自分を高めてくれる | 0.494 | 0.123 | -0.424 | -0.029 | 0.180 | 0.578 |
| 他のことより優先してまで結婚・恋愛をしたくない | 0.080 | 0.019 | 0.651 | -0.016 | 0.230 | 0.476 |
| 結婚につながる恋愛は無意味だ | 0.175 | -0.172 | 0.037 | -0.223 | 0.187 | 0.133 |
| 婚活（マッチングアプリ、婚活パーティ、結婚相談所等）を通じての結婚でもよい | 0.027 | 0.311 | 0.024 | -0.024 | -0.132 | 0.111 |
| 結婚・子どもについての認識 | | | | | | |
| 結婚して配偶者がいたら生活が楽しく豊かになる | 0.669 | 0.136 | -0.140 | 0.033 | 0.001 | 0.515 |
| 子どもを育てたら生活が楽しく豊かになる | 0.853 | -0.126 | 0.185 | 0.006 | 0.011 | 0.712 |
| 仲の良い夫婦を見ると幸せそうと思う | 0.625 | 0.028 | -0.059 | 0.110 | -0.067 | 0.418 |
| 小さい子どもを育てる夫婦を見ると幸せそうと思う | 0.632 | -0.089 | 0.168 | 0.194 | -0.082 | 0.415 |
| 結婚することで自由な時間の使い方ができなくなる | 0.025 | 0.531 | 0.441 | -0.052 | 0.031 | 0.525 |
| 結婚することで生活の中で気を遣う場面が増える | 0.065 | 0.543 | 0.333 | -0.110 | 0.129 | 0.449 |
| 子どもを持つことで経済的な余裕がなくなる | 0.031 | 0.762 | 0.028 | 0.080 | -0.141 | 0.606 |
| 子どもを持つことで家事や育児など生活の負担が増える | -0.120 | 0.783 | -0.155 | 0.051 | 0.087 | 0.656 |
| 理想の配偶者についての認識 | | | | | | |
| 家事の負担はどちらも平等に負担するべき | 0.048 | 0.041 | 0.035 | 0.881 | -0.024 | 0.784 |
| 育児の負担はどちらも平等に負担するべき | 0.008 | -0.020 | -0.086 | 0.817 | 0.074 | 0.712 |
| 家計（生活費）の負担はどちらも平等に負担するべき | -0.087 | 0.033 | 0.022 | 0.485 | 0.276 | 0.408 |
| 配偶者の年収は自分より高い方が望ましい | -0.030 | 0.002 | 0.026 | -0.072 | 0.544 | 0.273 |
| お互いが経済的に自立している関係でいたい | -0.082 | -0.003 | 0.085 | 0.186 | 0.699 | 0.619 |
| 累積寄与率 | 0.142 | 0.223 | 0.300 | 0.373 | 0.432 | |

注：因子負荷量が0.3を超える値については太字に変換し、網掛けを施している。それぞれの質問においては、調査票の提示した文章にどの程度当てはまるか、あるいは共感できるかという点について、4段階のリッカート法で尋ねた。

立・収入重視」と解釈した。以上の結果から、恋愛・結婚・子どもに関する価値観は、充実感や幸福感、子どもや結婚に伴う負担、夫婦間の役割分担、経済的基盤といった複数の側面から構成されていることが示された。

4.2. ロジットモデルによる分析：結婚意向の規程要因

以下では、因子分析で得られた因子得点およびアンケート調査で収集した属性変数を用いて、学生の結婚意向に関連する要因を分析した。分析には、結婚意向を4段階で測定したデータを被説明変数とする順序ロジットモデルを基本とし、あわせて二項ロジット分析を補足的に実施した。まず、順序ロジット分析では、被説明変数を「結婚意向（4段階）」とし、説明変数として、因子分析により算出した因子得点（生活満足度、将来不安、結婚・家族による充実感、結婚・育児コスト認知、恋愛への消極性、夫婦の平等志向、経済的自立・収入重視）と、個人属性（性別、学年、兄弟姉妹数、交際相手の有無、ライフデザイン学習経験の有無）を導入した。標準誤差の推定にあたっては、自由度調整済みの頑健標準誤差（Whiteの標準誤差）を用いた。また、多重共線性の懸念を確認するために分散拡大係数（VIF）を算出したところ、すべての変数

で2以下となり、深刻な共線性は生じていないと判断した。

さらに、結婚意向を大きく「結婚意向を示したサンプル（3・4）」と「結婚意向を示していないサンプル（1・2）」に二分した二項ロジット分析も実施した。この分析では順序ロジットと同様の説明変数を用い、結婚意向の有無に関わる要因を検討した。これらのモデルの推定の際には、プログラミング言語 R を用い、順序ロジット分析には MASS パッケージの polr 関数、二項ロジット分析には Base R の glm 関数を使用した。

順序ロジットモデル、二項ロジットモデルの係数の推定結果は表4に、係数を基に算出された限界効果については表5に示している。ロジットモデルでは、結婚意向を示さなかったサンプルが13名に限られており、アウトカム変数の分散の多くが考慮されていない状況である。そのため、以降では、順序ロジットモデルにおける結果を中心に解釈する。

まず、性別や学年、兄弟姉妹数といった学生の属性に関する変数の係数については、いずれのモデルにおいても統計的に有意ではなかった。このことから、学生個人の基本的特性は結婚意向と大きな関連を持たないことが示唆される。また、ライフデザイン学習の経験についても有意な相関は確認されず、結婚観との関

表4 ロジットモデルの推定結果

| | 順序ロジット | | 二項ロジット | | |
|---------------|--------|-------|-----------|-------|----|
| | 係数 | 標準誤差 | 係数 | 標準誤差 | |
| 性別 | 0.462 | 0.496 | 2.377 | 1.475 | |
| 学年 | 0.229 | 0.231 | -0.013 | 0.658 | |
| 兄弟姉妹数（本人含む） | -0.046 | 0.296 | 0.324 | 0.647 | |
| 交際相手の有無 | 0.030 | 0.233 | 0.561 | 1.083 | |
| ライフデザイン学習経験 | 0.196 | 0.508 | -0.073 | 1.071 | |
| 現状への満足 | -0.671 | 0.301 | * -0.380 | 0.736 | |
| 将来への不安 | -0.395 | 0.282 | -0.591 | 0.592 | |
| 恋愛・結婚に対する充実感 | 1.705 | 0.303 | ** 2.412 | 0.601 | ** |
| 結婚・子どもによるコスト | -0.612 | 0.252 | * -0.166 | 0.986 | |
| 恋愛・結婚によるコスト | -0.181 | 0.229 | -0.497 | 0.777 | |
| 夫婦間負担の平等志向 | -1.292 | 0.328 | ** -1.231 | 0.657 | |
| 経済的自立・収入重視 | 0.467 | 0.338 | -1.893 | 1.783 | |
| カットオフの推定値 | | | | | |
| Intercept 2 3 | 4.571 | 2.297 | | | |
| Intercept 3 4 | 2.203 | 2.196 | | | |
| Intercept 4 5 | 2.128 | 2.184 | | | |
| サンプルサイズ | 169 | | | | |

注：標準誤差は White の頑健標準誤差である。**, * はそれぞれ 1%, 5% の有意水準で有意であることを示す。

人口減少対策に向けた若者の結婚観に関する分析

表5 順序ロジットモデルの限界効果 (%ポイント変化)

| | 結婚したくない (n=4) | | どちらかといえば結婚 したくない (n=9) | | どちらかといえば結婚したい (n=65) | | 結婚したい (n=91) | |
|--------------|------------------|---------|---------------------------|---------|-------------------------|---------|-----------------|---------|
| | 係数 | 標準誤差 | 係数 | 標準誤差 | 係数 | 標準誤差 | 係数 | 標準誤差 |
| 性別 | -0.00053 | 0.00067 | -0.00502 | 0.00528 | -0.10974 | 0.10672 | 0.11529 | 0.11170 |
| 学年 | -0.00026 | 0.00033 | -0.00249 | 0.00253 | -0.05452 | 0.05018 | 0.05728 | 0.05254 |
| 兄弟姉妹数 (本人含む) | 0.00005 | 0.00031 | 0.00050 | 0.00287 | 0.01084 | 0.06246 | -0.01139 | 0.06562 |
| 交際相手の有無 | -0.00004 | 0.00025 | -0.00033 | 0.00239 | -0.00715 | 0.05206 | 0.00751 | 0.05470 |
| ライフデザイン学習経験 | -0.00023 | 0.00059 | -0.00213 | 0.00522 | -0.04659 | 0.11215 | 0.04895 | 0.11779 |
| 現状への満足 | 0.00077 | 0.00072 | 0.00730 | 0.00440 | 0.15952 | 0.06853 | * -0.16759 | 0.07080 |
| 将来への不安 | 0.00045 | 0.00048 | 0.00429 | 0.00349 | 0.09384 | 0.06495 | -0.09859 | 0.06781 |
| 恋愛・結婚に対する充実感 | -0.00196 | 0.00165 | -0.01854 | 0.00889 | * -0.40527 | 0.07203 | ** 0.42577 | 0.06924 |
| 結婚・子どもによるコスト | 0.00070 | 0.00065 | 0.00666 | 0.00390 | 0.14557 | 0.05923 | * -0.15293 | 0.06110 |
| 恋愛・結婚によるコスト | 0.00021 | 0.00030 | 0.00197 | 0.00260 | 0.04310 | 0.05335 | -0.04528 | 0.05595 |
| 夫婦間負担の平等志向 | 0.00149 | 0.00128 | 0.01404 | 0.00676 | * 0.30703 | 0.07048 | ** -0.32256 | 0.06975 |
| 経済的自立・収入重視 | -0.00054 | 0.00059 | -0.00508 | 0.00387 | -0.11097 | 0.07048 | 0.11659 | 0.07353 |

注：標準誤差の算出の際はデルタ法を用いた。**, * はそれぞれ1%, 5%の有意水準で有意であることを示す。

連は見られないという結果となった。

一方、学生の価値観に関する因子得点では、いくつかの因子において結婚意向と有意な相関がみられた。まず「現状への満足度」については、満足度が低い学生ほど結婚意向が高いという結果が得られた。国立社会保障・人口問題研究所（2023）の調査によれば、未婚者が独身生活の利点として最も多く挙げるのは「行動や生き方が自由」であり、男性で70.6%、女性で78.7%に達している。また、「一人の生活を続けても寂しくないと思う」と回答する割合も増加しており、特に女性では50.7%と過半数を超える。「現状への満足度」の高い学生は、こうした「一人でも生きていける」という感覚が強く、その結果、結婚に対するニーズが相対的に低い可能性が考えられる。

次に「恋愛・結婚に対する充実感」については、因子得点が高いほど結婚意向も高まる傾向が確認された。この変数は二項ロジット分析においても統計的に有意であり、結婚意向の有無そのものに関わる要因であることが示唆される。恋愛や結婚に積極的であり、結婚や子どもを持つことに強い意義を見出している学生ほど、結婚意向が高いという点は自然な結果であるといえる。

さらに、恋愛・結婚や子どもに関連するコスト認識との関係を見ると、「結婚・子どもによるコスト」は統計的に有意であった一方、「恋愛・結婚によるコスト」については有意な結果は得られなかった。このことから、結婚意向は、恋愛に伴う時間や労力の負担よりも、結婚後や子育てに伴う経済的・生活的コストへの認識とより強く関連することが明らかになった。この結果もまた、学生による将来を見据えた合理的な判断として、自然に解釈できる。

最後に、「夫婦間の平等志向」と結婚意向の関係について、夫婦間の平等性を重視する傾向が強い学生ほど、結婚意向が低くなる傾向が確認された。国立社会保障・人口問題研究所（2023）の調査によれば、近年、パートナーに仕事と家事の両立を求める若者の割合が増加しており、若者の間で家事や育児、家計の負担を平等に分担すべきという考え方が広がっていることがうかがえる。一方で、両親世代においては必ずしもそのような考え方が一般的ではなかったことに加え、現在においても夫婦間の平等性が十分に担保されていないケースも多い¹。そのため、夫婦間の平等を理想とする学生ほど、現実とのギャップを強く意識し、結婚に慎重な態度を示している可能性がある。したがって、若者の結婚意向を高めるには、理想と現実の間にある夫婦間の平等性のギャップを縮める取り組みが不可欠であると考えられる。

なお、順序ロジットモデルにおいて有意であっても、結婚意向を単純に「結婚したいか否か」の二値に変換して推定したロジット分析では、有意でない変数が多く見られた。また、表5に示した順序ロジットの限界効果に着目すると、「結婚したい」、「どちらかといえば結婚したい」というアウトカム変数のカテゴリーごとに係数の符号が逆転するケースも確認された。これらの結果から、順序ロジットで有意となった要因は、結婚意向の有無そのものと関連しているのではなく、「結婚したい」と「どちらかといえば結婚したい」といった結婚希望度の強弱に関連していると考えるのが妥当であろう。

5. おわりに

本研究では、愛媛大学社会共創学部の学生を対象と

したアンケート調査をもとに、若者の結婚観に関連する要因を検討した。アンケート調査の結果、ほとんどの学生が結婚の意向を示し、これは先行研究とも整合的であった。また、本アンケートの特性を生かして「どの程度結婚を望むか」という差分を利用した順序ロジットモデルを推定した結果、「恋愛・結婚に対する充実感」が結婚意向を高める一方で、「現状への満足」、「結婚・子どもによるコスト」、「夫婦間の平等志向」は結婚意向を抑制する傾向が明らかとなった。これらの結果は、近年の若者にみられる「一人での生活に対する満足」や「夫婦間の平等性への志向」といった価値観が結婚意向に影響している可能性を示唆している。

本研究の意義は、単なる学術的知見の蓄積にとどまらず、愛媛大学といよぎん地域経済研究センター(IRC)の共同活動の一環として、地域の人口減少という喫緊の課題に対して基礎的資料を提供する点にある。若者の結婚意識に関する調査結果は、今後の地域における少子化対策や結婚支援施策の検討に資するものであり、自治体や企業との連携を通じて具体的な施策につなげていくことが期待される。

ただし、本調査は特定の学部生を対象としたものであり、全国的な大学生や若者全般を代表するものではないという限界も存在する。今後は、対象を拡大した調査や、縦断的なデータ収集を通じて、時間をかけて価値観や結婚意向の変化を追跡していくことが求められる。また、結婚だけでなく出産や子育てに関する意識や、転入・転出の実態など幅広い研究を進めることで、より包括的に人口減少への緩和策や適応策を検討できると考えられる。

謝辞

IRCの續木美和子様、藤井晋平様、菅正也様、友近昭彦様、亀井康平様には、アンケートの作成および愛媛県における結婚観に関して貴重なご意見を賜りました。また、学生の皆さん(坂上夏輝さん、曾我結名さん、高橋南斗さん、田中大貴さん、藤田伊万里さん、松永紗英さん)には、IRCとの意見交換会を通じて、主に若年層の結婚観に関する多様なお意見をいただきました。さらに、愛媛大学社会共創学部の岡本隆先生には、アンケートの立案・実施、プロジェクトの調整、学生へのご指導など、多方面にわたりご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

註

- 1 愛媛県・一般財団法人地方自治研究機構(2023)では、一度退職した女性が再就職する際には非正規雇用に就くケースが多いことを指摘している。すなわち、若者が描く「夫婦間の平等」の理想が社会的・制度的な現実と必ずしも一致していないことを裏付けている。

参考文献

- 井梅由美子(2019)「大学生の結婚観、および子育て観について—自身の被養育体験、父母との関係性、対象関係に着目して—」『東京未来大学研究紀要』13, 11-21.
- 今川真治(2017)「恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーションと大学生の結婚観との関連」『広島大学大学院教育学研究科紀要』66, 213-222.
- 愛媛県・一般財団法人地方自治研究機構(2023)「人口減少の要因分析と対策に向けた調査研究」https://www.rilg.or.jp/htdocs/uploads/protect/R4_chousa/R4_04.pdf.
- 国立社会保障・人口問題研究所(2023)「現代日本の結婚と出産—第16回出生動向基本調査(独身者調査ならびに夫婦調査)報告書—」https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/doukou16_gaiyo.asp.
- 斎藤嘉孝(2012)「定位家族の親夫婦の関係性が若者の結婚への態度に与える影響：大学生を対象とした量的調査の結果より」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』9, 369-379.
- 鈴木直(2024)「日本人男女の結婚意識に関する統計分析」『学習院大学 経済論集』61(2), 117-139.
- 森香織・桂田恵美子(2017)「両親の夫婦関係が子供の結婚願望に及ぼす影響について—両親の結婚生活コミットメント及び夫婦仲に注目して—」『関西学院大学心理科学研究』43, 25-32.
- 山内星子・伊藤大幸(2008)「両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響：青年自身の恋愛関係を媒介変数として」『発達心理学研究』19(3), 294-304.